

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00868

研究課題名(和文)多読学習教材から「本物の英語」への架け橋：リーダーコーパスの拡張と有効性の検証

研究課題名(英文) Bridging the Gap between Extensive Reading Materials and Authentic Texts:
Expanding the Reader Corpora and Verification of their Effectiveness

研究代表者

加野 まきみ (Kano, Makimi)

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号：90352492

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語学習者が多読学習用リーダー(GR)などの学習者用の読み物から英語母語話者向けの一般書や研究に必要な学術書(AT)が読めるレベルになるまでの架け橋になるような資料の発掘やそれを用いた指導法の確立を目指した。語彙レベルや品詞や語長・文長などによる文の複雑さ、メタディスコース分析など、総合的なテキストの評価を行い、各種リーダーの特徴、難しさの可能性を導き出した。ATへの架け橋となるリーダー・シリーズとして、成人向け再教育用図書Easy Reader for Adultsシリーズのデータを選定し、リーダーコーパスに追加し、分析語彙や文法表現の分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまでその言語学的性質について十分には分析されてこなかった各種リーダーをGRと比較することにより、その特徴を明らかにした。コーパス分析により明らかになるGRとATの客観的な相違を、学習者の感じる「難しさ」という主観的ともとれる認識と関連付け、解明しようとする手法は独創的である。その結果、語彙・文法・言語使用域などの観点から「難しさ」の要素が見出された。従来、多読教材としては注目されなかったERAなどの特殊リーダーシリーズについて、その有効性を検討したことも意義深いと言える。これらの多角的な分析により、これまで以上に効果的な多読学習プログラムの方法論を提案することが可能となった。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to discover materials that serve as a bridge for English language learners, from graded readers (GR) and other learner-oriented reading materials to authentic texts (AT) intended for English native speakers, and to establish teaching methods using these materials. Various aspects such as vocabulary level, parts of speech, word and sentence complexity, and metadiscourse analysis were evaluated comprehensively to identify the characteristics and potential difficulties of English learners. To bridge the gap to AT, data from the Easy Reader for Adults series, designed for adult remedial education, was selected and added to the reader corpus for analysis of lexical and grammatical expressions.

研究分野：英語コーパス言語学

キーワード：リーダーコーパス 多読学習 Graded Reader Youth Reader Easy Reader for Adults Authentic Text Text Inspector

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

急速なグローバル化の中、学生に高度な英語運用能力を身につけさせることは大学の急務となっている。京都産業大学ではこうした社会的ニーズに応えるため、学生一人一人が授業時間外に多読という反復練習を行い、授業時間で学んだ新語彙・文法を定着させる「多読学習プログラム」を実施している。言語習得の為に多読学習が効果的であることは広く認められており、英語カリキュラムの一部として実施する教育機関も年々増加している。

多読学習では通常学習者は Graded Readers (以下 GR) と呼ばれる英語学習者向けに書かれ、レベル分けされたリーダーを読む。Claridge (2005)によると、GR とはオリジナルのストーリーを保ちつつ、低頻度語やコロケーションの置き換え、文の長さの調整、文体の均質化などのリライト作業が行われているが、英語としての真正性は保持しているとしている。しかし、GR は「生の英語」とは言えない (Swaffar, J., 1985, Honeyfield, J., 1977), 最終的に GR の限られた語彙と文法から脱却し、ネイティブスピーカー用に書かれた一般書を読めるようになるには GR と一般書の間には架け橋が必要である (Clafin 2012) など、GR に依存しすぎることに疑問視する研究もある。そのため、本学では GR に加えて Youth Reader と呼ばれるネイティブスピーカー用児童書 (以下 YR) も合わせて読むように勧めている。YR も段階的に難易度が増すよう、語数、低頻度語、文の長さやストーリーの複雑さ、テーマ・ジャンルなどが調整され、レベル分けされている (LEVELING CRITERIA より) が、テーマの幼稚さや幼児語・スラングの多様のため、YR などのネイティブスピーカー用児童書は英語学習者の多読学習には適さないという研究報告もされており (Webb, S., & Macalister, J., 2013), 議論は分かれている。

多読学習の最終的な目標は、学生が語彙や文法がコントロールされていない「本物の英語」で書かれた一般的な文書を読めるようになることであるが、そのために、学生に欠けているスキルを埋めることができる可能性のあるリーダーの一つは、成人英語話者の中でも難読者・識字レベルの低い英語話者向けリーダーで、健全な英語話者に向けて書かれているものよりは、容易に読めるように書かれている上に、YR のように低年齢向けに書かれたリーダーよりもテーマが日本の大学生にも適していると思われる。このようなリーダーを GR と併用して読むことで、学習者向けに書かれたものだけでなく、「本物の英語」が読めるようになるための架け橋になるのではないかという結論に至った。

もう一つの読み物の可能性は実際の学术论文である。学生は様々な小説やドキュメンタリーを読むことで、一般向けの図書を読むことができるようになっても、その英語力だけで専門分野の研究書を読むことはできない。さらに学术论文で使用される表現や構文を理解し、その文体になれる必要がある。そのために、学術分野に特化したデータの収集が必要であると判断した。

この二つの部分を現在構築しているリーダーコーパスに加え、各種ツールや語彙表を使用して比較・分析し、それぞれに特徴のある表現や構文を見いだすことができれば、学生が難しいと感じる可能性のある要素を抽出し、要素を特定することができるようになる。これらの新しい2種類のコーパスの構築と分析にさらなる時間が必要であることから、本研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

本研究では、多読学習において学習者が英語母語話者向けの一般書や研究に必要な学術書を難しいと感じるのはテキストのどのような特徴によるものなのか、コーパス言語学的アプローチにより特定することを目指す。学生が「難しさ」を感じるのは、GR の書き換えの対象である低頻度語や文の長さ・複雑さ、文法的な難しさなどが、実際の英語母語話者向けに書かれた Authentic Text (以下 AT) には含まれるのが要因であると考えられる。また、文化的背景知識の不足や、AT に含まれるスラングや比喩表現の多さなども要因となり得る。中條ら (2012) では、GR からは「多様な文法事項が含まれ、平易な語彙レベルで、かつ、文の長さやトピックも初級レベル英語学習者向けに適切な例文が多量に得られる」ことを確認しているが、GR と AT におけるこれらの違いを客観的に示した研究は数少ない。そのため AT やそれを読めるようになるための架け橋となる効果的な資料の発掘・コーパス化が必要である。研究代表者のこれまで行ってきた各種リーダーの研究では、実際に様々なテキストの分析を行ってきており、これまでのものとは種類の異なる読み物の有効性が見いだされてきた。

多読学習の最終的な目標は、学生が語彙や文法がコントロールされていない「本物の英語」で書かれた一般書・学術書を読めるようになることである。そのために、学生に欠けているスキルを埋めることができる可能性のあるリーダーの一つは、成人英語話者の中でも難読者や識字レベルの低い英語話者向けリーダー (Easy Reade for Adults, 以下 ERA) で、健全な英語話者に向けて書かれているものよりは、容易に読めるように書かれている上に、これまで多読学習に GR と併用して用いてきた Youth Reader と呼ばれるネイティブスピーカー用児童書 (以下 YR) のように低年齢向けに書かれたリーダーよりもテーマが日本の大学生にも適していると思われる。このようなリーダーを GR と併用して読むことで、学習者向けに書かれたものだけでなく、「本物の英語」が読めるようになるための架け橋になるのではないかという結論に至った。研究

代表者が有効性が高いのではないかと評価している ERA の具体的なシリーズとしては、Rapid Reads, Quick Reads, Open Door, Saddleback Hi-Lo books などがある。しかし、このようなリーダーは日本ではほとんど流通しておらず、アメリカ、カナダ、イギリスなどの出版社によるものがほとんどで、これまで全く扱ってこなかった。

しかも、学生は様々な小説やドキュメンタリーを読むことで、一般向けの図書を読むことができるようになって、その英語力だけで専門分野の研究書を読むことはできない。実際に大学での研究活動に役立つ学術論文が読めるようになるには、その文体に慣れ、使用される表現や構文を理解し、習得する必要がある。PLOS ONE research database などで使用可能な資料は増えているものの、ある特定の分野の資料を十分な量揃えられるまでには至っていない。そのために、学術分野に特化したデータの収集が必要であると判断した。

さらに、これまでのコーパス分析で明らかとなった「難しさ」の原因になり得る要素のうち、学生がどの要素（文構造、語法、意味など）に実際に難しさを感じるのかは実験的な手法での検証が必要である。例えば、文の長さや受動態文の割合、複雑な時制、動詞句、比喩表現などの数が要因として考えられる。本研究ではコーパス分析によって抽出された「難しさ」の可能性因子を意図的に制御した文章を作成し、学習者の理解度を測ることによって、どの要素が難しさに影響を及ぼしているのか特定を図る。また、理解度測定テスト後にはアンケート調査や個別のインタビューを通して、学習者の当該テキストに対する認識を調査する。こうして、難しさに影響する要因が解明されれば、その要素を克服する方法を探ることができ、各種リーダー・資料の有効性を検討することができる。

3. 研究の方法

本研究は以下のような流れで行った。まず、これまでに構築した Graded Reader (GR), Youth Reader (YR) などのリーダーコーパスに追加する Authentic Text (AT) の対象リーダーの選定・入手を行う。スキャナと OCR でデータ化し、漏れや間違いの確認・訂正を行う。次に、各コーパスを各種ツールや語彙表を使用して比較・分析し、可能性のある要素を抽出し、コーパス分析で抽出した要素を用い、検証実験用のテキスト・アンケートを作成、実験を実施する。実験結果の分析を通して、難しさの要素を特定し、「難しさ」克服への方法や、Easy Reade for Adults (ERA) などの使用の可能性についての提言を行う。初年度はリーダーコーパス新たに追加するリーダー・学術論文資料の選定を行う。アメリカ、カナダ、イギリスで ERA を発行している出版社やそれを支持する団体をさらに調査し、学術論文をオンラインで選定する。この際、レベルの範囲、各レベルの語数など、GR リーダーコーパスと バランスが取れ、同規模になるように資料を選択する。入手したリーダーをスキャナで実際にスキャンし、PDF 化、文字化を進める。テキスト版が完成したら、タガーを用いて品詞タグ付き版コーパスも作成する。リーダーは OCR で自動的に文字化した後、読み込み漏れや間違いがないか現物と突き合わせて確認を行う。

2 年目以降は AntConc, AntWordProfiler, RANGE, Microsoft Word「読みやすさの評価」などのツールや、BNC, COCA などの汎用コーパス、また BNC wordlist, The BNC/COCA word family lists, general service list, academic word list, COCA ngram list などの語彙表を使って、AT の「難しさ」の要因を明らかにするための調査を行う。上記の調査の結果、学生の「難しさ」認識に繋がった可能性があるかと判断された文法項目、文の構造、表現などを、意図的に操作した文章を作成する。また、その文章を読んだ被験者の理解度を測る質問の作成、事後アンケートも作成する。多読学習を一年間行った学生（約 200 名）を対象に上記の理解度テストを作成する。実際にどの要素が理解を妨げているのか、統計的な分析を行う。同時に、多読学習に他に組み込む可能性のあるリーダー・シリーズを見極め、それぞれ読み込むデータを決定する。現在考えられるシリーズとしては、英訳マンガ、成人向け再教育用図書、有名作家による子供のための小説などがある。それぞれのリーダーを GR, YR と同じ方法で読み込み、それぞれをリーダーコーパスとしてデータベースに追加する。各種リーダーコーパスのそれぞれの言語的特徴を明らかにし、多読学習への有効性を判断する。上記の結果を踏まえて、多読学習では GR に加えて、どのレベルで、どのようなリーダーがあれば、「難しさ」の克服に繋がり、さらには英語母語話者用の一般書や学術書 (AT) への架け橋になるのか、提案をする。研究の成果は広く国内外の学会で発表、論文を出版する。

4. 研究成果

初年度は、本研究の 2 方向からアプローチの一つである、実証的アプローチの調査準備を主に進めた。様々なツールを利用して、Authentic Text (AT) の「難しさ」の要因を明らかにするために行った調査の結果を元に、学生の「難しさ」認識に繋がった可能性があるかと判断された文法項目、文の構造、表現などを、意図的に操作した文章を作成した。データの分析には AntConc, AntWordProfiler, RANGE, Microsoft Word「読みやすさの評価」などのツールや、BNC, COCA などの汎用コーパス、また BNC wordlist, The BNC/COCA word family lists, general service list, academic word list, COCA ngram list などの語彙表を使用した。また、作成したその文章を読んだ被験者の理解度を測る質問の作成、事後アンケートも作成した。多読学習を一年間行った学生（約 200 名）を対象に上記の理解度テストを実施する前に、パイロット・スタディとして少人数の学習者を対象に理解度テスト・アンケートを行い、実際にどの要素が理解を妨げている

のかを分析し、テストへ修正を加えた。同時に、多読学習に他に組み込む可能性のあるリーダー・シリーズとして、アメリカ、カナダ、イギリスで出版されている成人向け再教育用図書（Easy Reade for Adults）、有名作家による子供のための小説などの種類を検討した。

2020年度は、昨年度に準備を行った実証的アプローチの調査を主に進める予定であったが、急な授業形態の変更のため、学習者を対象とした実証的な調査を行うことができなかった。その代わりに、上記の各種ツールを使用し、学習者が実際に読んだリーダーのデータの分析を行った。また昨年度作成した、文章を読んだ被験者の理解度を測る質問や事後アンケートに修正を加えてオンラインで実施できるように対応し、少人数の学習者を対象に理解度テスト・アンケートを行い、実際にどの要素が理解を妨げているのかを分析し、テストへさらに修正を加えた。昨年度に引き続き、多読学習に他に組み込む可能性のあるリーダー・シリーズの検討を行ったが、出版社との交渉が思うように進まず、データの収集には至らなかった。

2021年度は、引き続き各種ツールを利用した、学習者が読んだリーダーのデータの分析を行った。ここのツールに手作業でデータを入れて記録を残すため、作業が煩雑で、また学生アルバイトの手配もできなかったため、作業が滞ったため、効率的なデータ分析のための見直しを行い、新しく導入するツールの検討を行った。多読学習に他に組み込む可能性のあるリーダー・シリーズの検討した結果、Easy Reader for Adults シリーズが適当であるとの結論に達し、データの収集を開始し、分析語彙や文法表現の分析を行った。

2022年度は、これまでの分析ツールに Text Inspector を追加導入した。それにより、様々な語彙表での語彙レベルの判定、品詞や語長・文長などによる文の複雑さだけではなく、それより大きな単位で行うメタディスコース分析など、数多くの要素を一括して分析することが可能になり、作業の効率化が進んだ。コーパス分析で明らかとなった「難しさ」の原因になり得る要素のうち、学生がどの要素(文構造、語法、意味など)に実際に難しさを感じるのかを実験的な手法での検証を行うためのデータの選定を進めた。引き続き Easy Reader for Adults シリーズのデータの収集を行うと同時に、それ以外に大学生が接する英語で書かれた読み物(英語入試問題、英語テキスト、学術論文など)もコーパスに追加し、どのような特徴のある読み物を学習のいつの時点で接しているのかなど、実態調査も行った。

2023年度は、主に Text Inspector を使用することにより、作業を効率よく進めることができた。各リーダーコーパス間の語数などを調整し、必要に応じて、これまでの ER, YR リーダーコーパスの拡充も行った。入手したリーダーをスキャナで実際にスキャンし、PDF 化、テキストデータ化を進めた。また、詳細な語彙・構文分析のために、コーパスデータに品詞タグ付けをしたバージョンの作成も行った。昨年度までに作成した、文章を読んだ被験者の理解度を測る質問や事後アンケートに修正を加え、コーパス分析で明らかとなった「難しさ」の原因になり得る要素のうち、学生がどの要素(文構造、語法、意味など)に実際に難しさを感じるのかを実証的手法での検証を行うためのデータの選定を進めたが、実際には大規模な実証的調査には至らなかった。2023年度から始まった継続課題へと引き継ぎたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Peter Gobel, Makimi Kano	4. 巻 18
2. 論文標題 Specific Research Project: Technology integration and CALL beliefs in context: A longitudinal study of Japanese teachers and learners: Research Progress Report	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 京都産業大学総合学術研究所所報	6. 最初と最後の頁 159-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 加野まきみ	4. 巻 -
2. 論文標題 英語の中の日本語 借用と変化のプロセス	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ことばの不思議: 日本語と世界の言語	6. 最初と最後の頁 37-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Peter Gobel, Makimi Kano	4. 巻 4
2. 論文標題 Implementing a Mobile Peer-evaluation System for In-class Student Presentations	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 APACALL Book Series	6. 最初と最後の頁 137-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 加野まきみ, ゴーベル・ピーター	4. 巻 14
2. 論文標題 プレゼンテーション授業における学習者相互評価モバイルアプリ使用とそれに対する学生の意識について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都産業大学総合学術研究所所報	6. 最初と最後の頁 47-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Makimi Kano	4. 巻 5-11
2. 論文標題 How Japanese loanwords are assimilated into English	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 MindBrained Think Tank+	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 加野まきみ
2. 発表標題 リーダー・コーパスの構築・分析「読みやすさ」を測る指標の確立を目指して
3. 学会等名 ことばの科学研究センター 2023年度第7回研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Peter Gobel, Makimi Kano
2. 発表標題 Teaching Cultural Theory Through Digital Task-based Projects: Content-based Instruction and Task-based Learning
3. 学会等名 WorldCALL2023: CALL in Critical Times (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Peter Gobel, Makimi Kano
2. 発表標題 Teaching cultural theory through digital story tasks: Content-based instruction and TBLT
3. 学会等名 10th International Conference on Task-Based Language Teaching (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 加野まきみ
2. 発表標題 Corpus Linguistics for English Teachers
3. 学会等名 2022 年度 KSU 英語教育研究会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加野まきみ
2. 発表標題 既存語と借用語の使い分け コーパスで探ることばの変化(2)
3. 学会等名 ことばの科学研究センター 2022年度 第5回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加野まきみ
2. 発表標題 英語の中の日本語ー借用と変化のプロセスー
3. 学会等名 ことばの科学研究センター開設記念講演会 ことばの不思議～日本語と世界の言語～
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Peter Gobel, Makimi Kano
2. 発表標題 Task-Based Language Teaching and Technology: Attitudes and Solutions
3. 学会等名 Thailand TESOL International Conference 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Peter Gobel, Makimi Kano
2. 発表標題 TBLT and Technology: Attitudes and Solutions
3. 学会等名 57th RELC International Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 加野まきみ
2. 発表標題 海を渡った日本語：コーパスで探ることばの変化
3. 学会等名 ことばの科学研究センター 2021年度 第2回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 加野まきみ
2. 発表標題 Key Concepts in Corpus Linguistics as a Research Tool
3. 学会等名 外国語学部 研究交流会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Makimi Kano
2. 発表標題 Revealing the characteristics of reading materials for university students using a corpus linguistics approach
3. 学会等名 JALT Kyoto Annual General Meeting (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Gobel Peter, Makimi Kano
2. 発表標題 Utilizing a Mobile App for Peer Evaluation of Presentations
3. 学会等名 ETA-ROC (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Makimi Kano
2. 発表標題 What can corpus linguistics do for the language teachers?
3. 学会等名 JALT CALL (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Makimi Kano
2. 発表標題 Japanese EFL learners' use of online translation as a dictionary substitute in academic writing classrooms
3. 学会等名 GloCALL
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Peter Gobel, Makimi Kano
2. 発表標題 EFL learners' use of online translation as a dictionary substitute
3. 学会等名 eLex
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Peter Gobel, Makimi Kano
2. 発表標題 Evaluation of a Mobile Peer-Evaluation System for In-Class Presentations
3. 学会等名 CELDA
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加野まきみ
2. 発表標題 多読学習の可能性とMReaderを使った効果的な学習プログラムについて
3. 学会等名 FLEXICT Expo 2019 (招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	ゴーベル ピーター (Gobel Peter) (40329925)	京都産業大学・文化学部・教授 (34304)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------